

【視察調査報告書】

会 派 名	自民党新政会
参 加 議 員	【議員】11名 馬場貴大、福安徹、吉本孝良、川村奈緒美、小林秀司、岸田功典、西室真希、立川寛之、内田由香利、長谷川順子、大竹利明
日 程	令和5年（2023年）7月19日（水）～7月21日（金）
詳 細	
視察日及び視察先	7月19日（水） 北海道白糠町 アイヌ文化活動施設 ウレシパチセ
視 察 内 容	白糠町行政取組並びにアイヌ伝統文化振興について
概 要	白糠町独自の「子育て応援日本一のまち」を目指す取組により人口減に一定の効果が表れ、2022年度ふるさと納税額全国4位の実績の取組等を学んだ。また、原半左衛門をはじめとする八王子千人同心の歴史のご縁から、本市小学生が本年8月に訪問する。本市との今後更なる親交を深める意見交換を行った。
所 感 等 (意見・課題・本市への反映など)	<p>本市でも「子育てナンバーワン」を目指しているが、白糠町では、「子育て応援日本一」を目指した取組を行っている。結婚支援金、出産祝い金、特定不妊治療費全額補助、公立小中学校の入学支援金、小中高給食費無料、移住支援等々、白糠町独自の施策を実施し、人口減少が収まっている。</p> <p>ふるさと納税の取組については、白糠町の概要、取組、魅力、移住・定住支援策などを盛り込んだ、「白糠 SRNK」ふるさと納税ポータルサイトパンフレットを発行し、クオリティの高い広報活動に専念するなど、2022年度ふるさと納税額全国4位 125.22億円納税の実績を得ている。自治体独自の取組に加え、誰もが見やすく魅力を感じやすい広報プロモーションを行うことにより、一定の成果を出していることは、本市としても学ぶことが多い取組ではないかと思う。</p> <p>アイヌ文化活動施設 ウレシパチセは、「ウレシパチセ」とは「互いに育む家」を意味し、アイヌ伝統文化の体験、交流、情報発信の場として、古来より大切に守り伝えられてきた歌や踊り、自然と共に生きるアイヌ民族の文化を体感でき、国内外へアイヌ文化の情報発信の拠点である。</p> <p>八王子の祖先・千人同心たちもアイヌの人々と交流したことから、八王子の小学生も白糠町を訪れ、アイヌ文化に触れさせて頂く貴重な機会を頂いている。これまで、八王子千人同心 原半左衛門が白糠町に居た物的証拠がなかったが、2020年に原半左衛門が奉納した仏具が釧路市のお寺で見発見されたことにより、今後、本市博物館と連携し調査研究を進め、さらに八王子市と白糠町の親交を深めていきたいと本視察団と確認をした。</p>
視察の様子	



【写真】

◇意見交換会

参加者；白糠町議会 富田忠行議長、森谷寿彦議会事務局長、白糠町教育委員会川島眞済教育長、社会教育課 山田雄大課長、文化振興係 相澤香係長、竹ヶ原浩司係長、白糠アイヌ文化保存会 磯部恵津子会長

◇アイヌ民族衣装を着用体験

【質疑応答】

Q. 2019年、アイヌ施策推進法が改正され、4年が経過したが、法改正によって、アイヌ文化振興にどのような影響があったか。また、新たな課題などはあったか？

A. アイヌ振興事業を行うための交付金が増設され、その交付金を活用して、今までできなかったことが可能になった。アイヌ文化に関わる場所の整備や教育にも活用している。

新たな課題については、現状、ハード面では無いが、アイヌ文化継承においては、アイヌ協会会員の高齢化に伴う後継者不足が懸念されている。

詳 細

視察日及び視察先	7月20日（木） 北海道小樽市 小樽市役所
視 察 内 容	小樽市の日本遺産について
概 要	<p>49の市と町のシリアル型「北前船」と空知・室蘭・小樽の「炭鉄港」と二つのストーリーの構成文化財を有する小樽市では、令和3年「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～『民の力』で創られ蘇った北の南部～」というストーリーで候補地域となっており、本認定に向けこれまで様々な取り組みを行っている。</p> <p>小樽市日本遺産地域プロデューサーの育成では、①マーケティング②地域マネジメント③歴史文化④プレゼンテーションに係る基礎研修・実施研修を実施し研修のアウトプットを目的に課題・発表・講評を受ける取組みにより、実際に「日本遺産周遊アプリ」が実用化されている。</p> <p>この他にもインタープリターの育成を行い、ストーリーと構成文化財を市民や観光客に伝え、日本遺産の普及啓発にもつながっている。</p> <p>また、ストーリーを活かした商品の開発では「おたるハート缶」制作体験や「心臓」をテーマにした高校生の演劇公演、ストーリーに関連する食文化の調</p>

査「小樽めしをどうぞ!」の発行など、これまで実に多くの事業を行ってきた。
 令和5年度予定事業としては、運河100年イベントとの連携で、市内の高校生が中心となって周遊アプリを企画運営する取り組みを行う。
 その他の事業としては、若い世代による日本遺産航海ワークショップの実施、「心臓」をテーマに日本遺産かるたの制作などの新規事業と引き続き地域プロデューサーやインタープリター育成などの人材育成や普及啓発にもさらに力を入れていく。

北海道の「心臓」と呼ばれたまち小樽は、石炭輸送のため北海道初の鉄道が建設され、港とともに物流拠点となり石造倉庫・卸商や金融機関が軒を並べ、仕事を求める人々が殺到し、明治中期以降の日本の近代化とともに発展してきた。しかし、昭和40年代エネルギーが石炭から石油に変わる中、貨物も減少し、運河の荒廃など高度経済成長期に取り残されていきました。増え続ける車社会の対応や経済再生のため、運河埋立てと道路計画により、倉庫群の取り壊しが始まった。
 そのような中、10年にもわたる小樽運河を守る会と市民による「小樽運河保存運動」の結果、散策路として整備され「斜陽のまち」から観光都市となり小樽のまちは再生を遂げた。
 小樽市の日本遺産本認定に向けた様々な取り組みは、まさに「民の力」で蘇った小樽のストーリーのように、多くの市民の関わりや強い想いが伝わってきた。小樽運河にある取り壊しが決定されていた工場として使われていない建物（北海製缶）を「取り壊さずに残してほしい」という市民の声に、市が無償譲渡を受けることで、サマーフェスタが開催されるなど、現在も小樽市の「民の力」で観光景観や地域活性化に取り組んでいることがとても印象的であった。
 東京都内初の地域型日本遺産の認定を受けている本市においても、11月に行われる日本遺産フェスティバルを契機に、「民の力」を活用した取組を進め、今後の統括評価・継続審査に臨んで頂きたいと思う。
 小樽市役所やその他様々な公共施設・観光施設は明治中期に建設された石造創りの大変趣のある建物が多く残っており、小樽文化を大切に、観光資源となっている。小樽市議会場内も見学させて頂き、貴重な経験となった。

所 感 等
 (意見・課題・
 本市への反映など)

視察の様子



市役所にて座学・意見交換会



小樽市議会議場にて

【質疑応答】

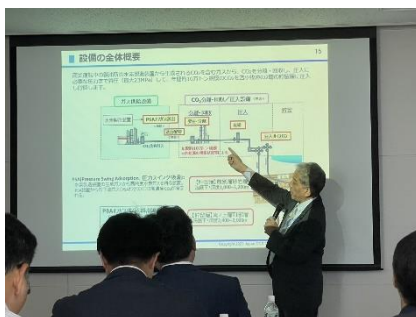
Q. たくさんの方の取り組みをされている中で、一般市民が多く参加できる事業としては、どのような取り組みがあるか？

A. 本年9月に開催される運河100年イベントでは、北海道庁と連携して北海道の日本遺産が集結するフェスティバルが行われる。このイベントの成功に努力し、来年の本認定に向けたと考えている。

詳 細

視察日及び視察先	7月20日(木) 北海道苫小牧市
視 察 内 容	苫小牧における CCS 大規模実証試験センター
概 要	<p>CCS(Carbon dioxide Capture and Storage)は、二酸化炭素を分離・回収して地中に貯留する技術の事で、既に2019年11月にCO₂圧入目標30万トン達成、現在もモニタリングを継続中。</p> <p>分離・回収から貯留までの一貫システムも日本初である事、そして大都市部の近接エリアでのCO₂地中貯留も世界で唯一、加えて低いCO₂分離・回収のエネルギーは世界トップレベルで、経済産業省肝いりのプロジェクトである本施設を視察しカーボンニュートラルを実現するための具体的な取り組みを学んだ。</p>
所 感 等 (意見・課題・本市への反映など)	<p>苫小牧市においても本市と同じくゼロカーボンシティ宣言を行っており、削減しきれないCO₂を地中に貯留するCCSは必要不可欠な技術であると認識をした。安全性についても平成30年北海道胆振東部地震が発生した時にも異常もなく非常に高いレベルで管理されている施設であり、地元市民・企業にも見学会や講演会、子ども実験教室等を定期的で開催され地元理解も得られている。</p> <p>今後、技術的確立・コスト低減・適地開発や事業化、そしてCCU(Utilization: 二酸化炭素の有効利用)が課題となるが、世界市場で日本が牽引する分野として非常に注目される。</p>

視察の様子



※管理棟での経済産業省エネルギー庁資源・燃料部 CCS 政策室長 佐伯様・日本 CCS 調査㈱からの説明

【質疑応答】

Q. 貯留した CO2 はどうなる？

A. 貯留槽に閉じ込められた CO2 は、貯留層の隙間にある地層水に押しつけて徐々にその貯留層内に広がっていくが、上部には遮蔽層があるため、長期間にわたり安定して貯留槽内に閉じ込めることができる。長い年月を経過した CO2 は、地層水に溶解し、さらには周辺の岩石と反応して鉱物化し、安定的に閉じ込めることができる。

Q. CCS の地上設備の安全性はどのようになっているのか？

A. CCS の地上設備は、CO2 を分離・回収するための高さ 50m 程度の塔や熱交換器、ポンプ、圧縮機、配管、パイプラインなどで構成されている。設備から CO2 が漏れる可能性は、大規模地震などによる機器類の損傷などが考えられるが、高圧ガス保安法などの関係法令に基づく管理を徹底することで、CO2 が外部に漏れ出る事を防止している。また CO2 漏洩検知システムを設置し、万一 CO2 が漏れた場合にも、漏洩を最小限にとどめるための安全対策を講じている。

Q. CCS を社会実装していくためには、貯蔵地と CO2 を生み出す拠点が近くにあることが現状は条件になっているが、これを社会に広げていくためには輸送船や輸送コストも含めたところで、CCS が大きなビジネスになる可能性についてどう考えるか。

A. 日本は資源のない国といわれるが、砂岩と遮蔽層の地質が貯留に適している場所が現時点で 11 箇所に点在しており、合計すると 160 億トン分であると推定され CCS の分野においては、資源国ともいえる。カーボンニュートラルに向けた世界市場は 40 兆円とも言われており、技術立国日本として液化 CO2 船舶実証事業も 2024 年から開始される予定で分離・回収から貯留するまでの技術も含めて日本が世界をリードする産業として期待される。

Q. CCS (貯蔵) だけでなく、CCU (活用) も重要になるが、現状はどのような状況でいるか？

A. 他のエネルギー燃料との競合になるのでコスト面を考えると太刀打ちができないが、現時点では CO2 を再利用したエネルギーとして既存のエネルギーと混合を想定している。

詳 細

視察日及び視察先 7月21日(金) 北海道 苫小牧市

視 察 内 容 蝦夷地開拓移住隊士の墓・勇武津資料館

概 要

1. 蝦夷地開拓移住隊士の墓 (苫小牧市指定史跡)

蝦夷地開拓移住隊士 (千人同心) を含む墓石群は、勇払開拓史跡公園内にあり、1956 年 (昭和 31 年) 3 月に苫小牧市指定文化財として指定された。史跡公園には、18 基 29 名が祀られており、これらの墓石群は、1800 年～1810 年、1830 年代、1850 年～1867 年と大きく 3 つの年代に分けられる。

1800 年～1810 年の墓は、蝦夷地の警備と開拓を使命に移住した八王子千人同心及び会所の役人関係者 7 基 12 名のもので、その中には会所詰め役人の川西祐助の妻である梅の墓が含まれている。弱冠 25 歳という若さで 2 人の幼子を残して世を去ったエピソードから、当時の過酷な生活環境をうかがうことができる。

1830 年代の墓は、松前藩復領の頃で勇払場所請負の商人、山田屋と東北地方の商人と思われる 2 基 2 名のものでされる。

1850 年代～1867 年は、幕府が再直轄とした頃のもので、会所の役人とその関係者 6 基 7 名、場所請負の商人山田屋の関係者 1 基 6 名の墓とされている。この他に 2 基 2 名の時期及び所属不明の墓が祀られている。

	<p>これら勇払の墓石群は、地域に散財していたが戦後に集約され、1956年（昭和31年）に市指定文化財となった後は手厚く管理されている。その後、1973年（昭和48年）に苫小牧市開基100年にあたり、史跡公園が整備された。1998年（平成10年）には市制施行50周年記念事業として、墓碑覆屋の改築、駐車場整備が行われ、現在に至っている。</p> <p>2. 勇武津資料館</p> <p>勇武津資料館は、苫小牧市制50周年及び八王子千人同心移住200年を記念して、2001年（平成13年）4月に開館した。資料館の名称は、勇払の地名から付けられている。特に江戸後期は、「勇武津」という表記が多かったことから、これにちなんで「勇武津資料館」とした。勇払という地名はアイヌ後の「イ・プツ」（「その入口」という意味）から付けられており、「それ」とはシコツ（現在の千歳）を差している。津軽藩の書物では平仮名で「いぶつ」と表記されていたことも分かっている。その後、江戸後期には「勇武津」という漢字が使われるようになった。明治時代には勇払は、「勇佛」書かれていたが昭和28年頃から略されて現在の「勇払」となっている。</p> <p>資料館の外観は、1810年（文化7年）の「勇武津会所配置図」に描かれた幕府の出張所である会所を参考に建設された。国産のスギ材で内外装され、土間にはカマド、板の間には囲炉裏が復元されるとともに、各種調度品が並べられている。八王子市から寄贈された織機や車人形も展示され、特に織機では例年機織り体験などに使われている。多目的研修室には、勇武津会所、八王子千人同心、開拓使三角測量勇払基点、弁天貝塚出土品、アイヌ民具や北前船関係の歴史資料が展示されている。特に開拓使三角測量勇払基点は、勇払開拓史跡公園に隣接した「勇払ふるさと公園」内に基点の石柱が建てられており、日本で始めて近代的な測量技術を導入した事業として重要な遺産であり、北海道の指定文化財に指定されている。</p>
<p>所 感 等</p> <p>（意見・課題・本市への反映など）</p>	<p>2日前の白糠町を含め、この苫小牧市勇払の視察を通じて、改めて北海道の開拓の礎を築いた先人達の御労苦に感謝と敬意を評したいと思う。1800年（寛政11年）に八王子千人同心の千人頭である原半左衛門（胤敦）と弟の新介を中心に130名の開拓使がここ勇払と白糠に65名ずつの隊士が入植した。当時は現在のように機材や装備類、着衣などが充実している訳ではなく、厳しい寒冷地での警備及び開拓作業は極めて困難が伴ったことは想像に難くない。結果、栄養失調や病気等で32名の隊士が命を落としている。幕府の政策変更もあったが、千人同心達の開拓は4年感の活動をもって解散している。しかし、その後も1800年代後半には役人や商人がサイド入植し、原半左衛門達の意志が受け継がれ、現在のまちづくりの基礎をつくったという歴史は、苫小牧市・白糠町の人々だけでなく、千人同心の拠点であった八王子市民としても後世に受け継いでいくべきものだと改めて感じた。</p> <p>本市では歴史の副読本で一定の紙面を割いて八王子千人同心の功績について学ぶ機会を設けている。また、白糠町とは中学生の交流事業が行われるなど、行政間に留まらず、市民レベルでの交流も行われている。しかしながら、</p>

実際に現地に足を運んでみると現地（苫小牧市、白糠町）の人々との間で熱量の差を感じる点は否めない。八王子に住んでいる者としてアイデンティティを確立するための取組が必要なのではないかと思う。今年は苫小牧市と姉妹都市の盟約を締結して 50 周年にあたる。桑都日本遺産センター八王子博物館（はちはく）では、姉妹都市盟約締結 50 周年を記念した企画展「八王子と苫小牧～千人同心がつないだ絆～」を開催している。一方の苫小牧市では市報の中で特集ページを作成して配付する予定（8月）である。この 50 周年を契機に両市の歴史的なつながりに対する理解がさらに深化することを期待したい。

視察の様子



勇武津資料館全景



二階堂氏による講義の様子



蝦夷地開拓移住隊士の墓